

小田実全集（評論 第15巻）

毛沢東



講談社

小田実全集

Makoto Oda

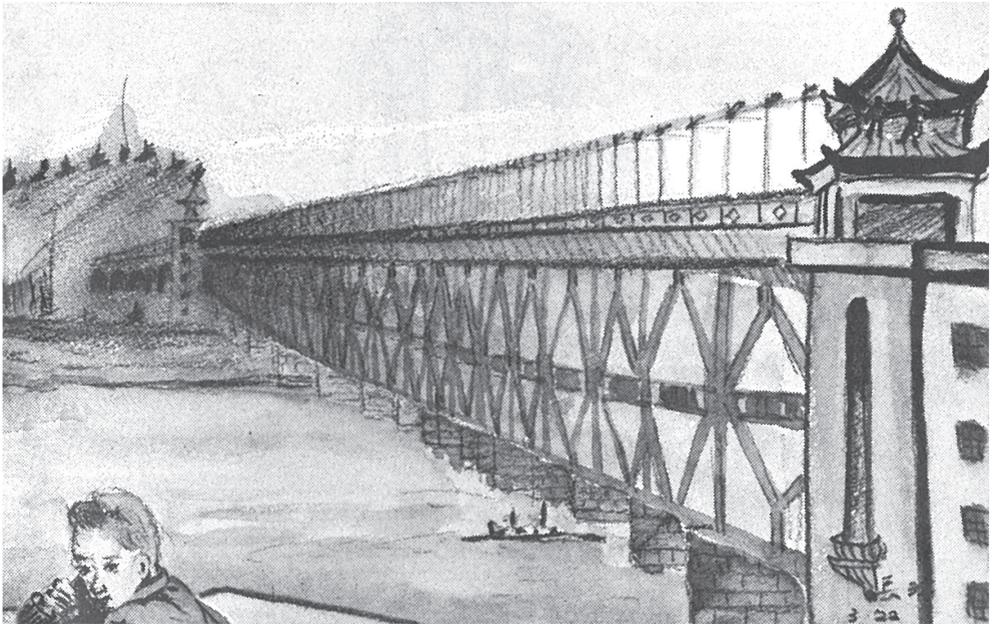




カシュガル・正座

目次

I	延安へ旅する	9
II	「長征」のあとをたどる	33
III	普遍と土着	81
IV	「農村」から「都市」へ	103
V	勝利と異端	161
VI	「文革」まで	201



VII 「文革」の終焉・彼の死 241

VIII 「以後」にあつて
毛沢東を考える 279

あとがき 316

毛沢東の年譜 322

装画・玄順恵

長江、毛沢東がここから泳いだ



毛沢東

I
延安へ旅する



市場にて



延安，洞穴風景

このごろ中国へ行つてすぐ気がつくのは、人びとがよく旅をしていることである。観光地へ行くと、どこでも人でいっぱいである。北京の故宫、万里の長城、西安の華清池、南京の中山陵……とありふれた観光地をちよつと考えてみても、どこもかしこもたいへんなにぎわいだ。観光客のなかには私のような外国人もいるが、たいていは中国人である。それもたいていが一見してえらいさんでないチマタの人で、労働者、農民、それに兵士までがいる。まさに「労・農・兵」こそつて旅をして歩く。若いものもいれば、中年、老人もいる。昔は貧しくて観光地へ出かけることのできなかつた農民もけっこう旅して歩いていて、いつか西安の大雁塔、華清池とつづけて出会つた農民のグループは五十代、六十代の近在の農村から来た、まだまだ元気なおばさん、おばあちゃんの一行だった。なかにひとり、テン足の老婆がまじつていたのが強く印象に残つた。

旅行熱につけ加えてカメラ熱である。観光地にやつて来る観光客の多くがカメラを首にぶら下げていて、あつちこつちで撮りまくる。カメラは日本製のたまに見かけたことはあつたがたいがい国産——中国製で、三五ミリのカメラもあることはあるが二眼レフがまだまだ多い。これはちよつど安価な二眼レフのカメラが始めた今から三十年近い昔の日本の状況に似ている。あの当時人気のあつたのは「リコーフレックス」だが、それとそっくりのかたちをした「イースタン」という名の上海何んとか公司製の二眼レフを、これもまたいつか万里の長城で出会つた天津の若い工場労働者が持つて

いた。彼の月給は六十元だという話だったが、「イースタン」の値段は七十元。少し無理をすれば買えない値段ではない。二十年近い昔、「リコーフレックス」の値段はたしか八千円だった。そのころ私の新米高校教師としての月給は七千円。国家公務員の上級職の初任給が八千六百円だったか。ついでに言っておくと、フィルムもそろそろカラーに移り始めている。もつとも主力はまだまだ白黒フィルムだが、たしか、「リコーフレックス」が爆発的に売れたころ、私たちもまだ白黒フィルムを使っていた（八四年現在で二元は百円余）。

こういう観光熱、旅行熱盛んな中国で、さっぱり人の行かない観光地がひとつあって、それが他ならぬ「革命の聖地」延安であった。どれくらい人が行かないのかと言うと、私と私の「人生の同行者」（妻のことを私はそう呼ぶ）は八三年五月に西安から飛行機に乗って延安へ行ったのだが、西安の空港の待合室にはじめてたくさんいた外国人の観光客はそのうち重慶とか北京とかそれぞれの行先めがけて発って行って、いざ延安行の小さな飛行機に乗り込んでみると、外国人の観光客は私たちだけになっていた。中国人の観光客らしい人の姿も見えない。そして、延安で三階建ての大きなホテルに泊まった外国人観光客は私たち二人だけだった。「文革」のときには満員だったにちがいないホテルである。中国人のほうでも同じホテルに泊まった観光客は、「延安時代」をなつかしみに来た「革命感傷旅行」の客とおぼしき一見してえらいさんの老人だけで、ほかには見あたらぬ。ほかのところには泊まっているのかも知れないと思つたが、ひと晩泊まった翌日あちこちの「革命名所」（必要するに洞穴見物である。「ここが毛主席が『矛盾論』をお書きになった洞穴です」というぐあい）で出会つたのは、そのえらいさんの老人ひとりだった。私たちが延安を訪れたのは五月のはじめだつ

たが、私たち以前に延安に来た外国人観光客はノルウェー人のたぶん私たち同様に「もの好き」二人。日本人はその年私が始めてであった。あとでこの地区のえらいさんから聞いた話では日本人の旅行団は前年一年でやつと三組が来た。とにかくえらい変りようである。有為転変はやりすたりは世の常と言え、その人影のない、今の中国の標準から言えば豪華とも巨大とも言えるホテルのなかで感慨なきにしもあらず。食堂にはけつこう人が来ていたが、私たちと中国人の「革命感傷旅行」のえらいさんの老人以外はすべて地元の「幹部」たちであるように見えた。

そのホテルでの食事のことをちよつと言っておけば、北京、上海あたりのホテルとくらべてやはり内容も貧しかったが、ことに書きとめておきたいのは、米の飯の代りにアワ飯が出たことだ。これは二つのことを示していたように思う。ひとつは、さつきも少しふれたように中国の農村はたしかに今これまでの中国の歴史にかつてなかつたほどゆたかになって来ているが、それには地域差などさまじまな格差があつて、地利に恵まれぬ延安のような僻遠の地の農村はまだまだ恵まれず、大都会近郊の農村とのあいだに大きな格差を生じつつあること——これはすぐ読みとれることがらだが、もうひとつここで考えてみると、もしかつてのように外国からの観光客が延安につめかけているころだつたら、外国に対する体面を重んじる中国のことだ、「革命の聖地」のホテルの食事とあつては、何をいってもどこかから米を運んで来たにちがいない。まさか、かつての苦闘をしのばせるためにアワ飯を食わせたりしているわけではないだろう。それは、やはり、外国人観光客が訪れていないせいだといひことだつた。

司馬遼太郎は「文革」のあいだ——と言っても終りにさしかかったころだが、延安に旅している。「革命の聖地」行とあつて、飛行機のなかだから、司馬がその一員だった旅行団のまとめ役（もちろん日本人）が、司馬たちに「革命の聖地」に行くのだから、ネクタイをして身じまいを正せと「命令」なさつたという話が彼の旅行記には出ていた。（なるほど、そんなものだったのかいな）といつか読んだ旅行記が奇妙にあざやかに記憶に残っているのだが、つまるところ、延安行はあのころは「革命の聖地」見物どころか「革命の聖地」詣であつたわけだろう。まさしく、身じまいを正せ、だ。

私の場合はどうだったのかと言うと、延安は、やはり、私の気持のなかで、ただの観光地とはちがつていた。万里の長城へ出かけるのとは心がまえがたしかにちがつた。ただそうかと言って、「革命の聖地」へそれこそ身じまいを正して「お参り」をするというのもなかつた。それでいて「革命の聖地」見物でもなかつた。「見物」ということには、「火事場見物」という言い方が示しているように、どこか野次馬めいた無責任さがある。私の気持は、やはり、もつと荷担していた。それではどういうことになるかと言うと、もつともびつたりするのは「現場」を見に行ったという言い方だ。それが私の気持にそくしている。たとえば、私は延安を訪れた年の前年、八二年の秋にレバノンのベカー高原へパレスチナ解放闘争、レバノン左派の闘争の「現場」を見に出かけているし、そのあと、ベトナム、カンブチアの「現場」も訪れている。その「現場」は、ひとつが現在の解放闘争の「現場」であるなら、もうひとつはつい最近までの解放闘争の「現場」だったが、その二つの「現場」を訪れたときに似た

感覚が延安へ出かける私の気持の底にあった。そんな気持で私は延安行を中国の当局者に頼み、西安から飛行機に乗った。動機はどうであれ、今「革命の現場」を見に出かける人の数はきわめて少ない。延安へ飛ぼうとして西安に着いた私たちを出むかえてくれたえらいさんは、開口一番、西安のことはそちのけにして「延安へ行かれるという話だが、延安は中国革命にとつてもっとも大事な場所です。そこに行かれるのはほんとに意義のあることだ」と賞めてくれたが、何か見当ちがいな気持がしたのも事実だった。

3

西安の空港を出てしばらく飛ぶと、下界には山地がひろがり始める。人民服を着た中国人の乗客たち（は、私たちと同行した通訳兼案内役のT君とさつき述べた「革命感傷旅行」のえらいさんの老人以外は、すべて地元の人なり、延安に何か用事があつて出かける人たちだと見えた。地元の人とおぼしき人には、どう見ても農民としか見えない朴訥な老人もいて、飛行機は鉄道のないこのあたりでは非えらいさんの民衆の足ともなりかかっているようだった。もちろんまだ、ニワトリを抱えたおばあさんがそのまま乗って来るソビエトの飛行機ほどにはそうなっていないにしてもだ）でいっぱい旧式のソビエト製飛行機の窓に顔をくつつけるようにして下を見ていると、次第に下界が山地になつて行くのがよく判つて、興味がつきない。それもただ一本、高い山脈がつらなつてそれが高くなつて行くというのではない。深い切れ込みの地峡を縦横につくりながら、大陸の大地そのものが底からまるごと隆起するようにだんだんと高くなつて黄土の山地を形成する。私がこれまでに見た、また日本人

の多くにとつても写真か何かでおなじみの風景で言えば、小型のグランド・キャニオンだ。いや、ひとつひとつの隆起の高さと切れ込みはたしかに小型の感じだが、ひろがりやグランド・キャニオンを超えているのではないか。大地の盛り上りの隆起のてっぺんに畑地がつくられていたり、木が立っていたりする。そして地峡の底に道路が走って、ところどころ家が見える。ときにはそれは村落をかたちづくる。

下界をしきりに眺めおろしながら感慨あまた起こって来たが、三つだけここで触れておきたい。

ひとつは、延安という土地、こうした大地のグランド・キャニオンの隆起に取り囲まれて攻めるにむつかしく、守るにやさしかった土地であったことだ。「中国プロレタリア革命搖籃の地」(とどこかの案内書に出ている)の井岡山も、険しい山岳地帯のなかにある天然の要害の地で、井岡山と言い延安と言い、なるほど「根拠地」を中心に「解放区」をつくり、地主の土地を農民たちのものにする「土地革命」を行ないながら遊撃戦を展開して、「農村」をもって都市を包囲し、ついには都市に依拠する相手権力を打倒するという毛沢東の革命戦略はなるほどこういう土地柄にぴったりしたものであったにちがいない。飛行機から下界に展開されるグランド・キャニオンを眺めているうちに、それは実感をもって納得できた。

飛行機上でのもうひとつの感慨は、中国の広さと深さにかかわつてのことだ。なるほど広さから言えば、本場アメリカ合州国のグランド・キャニオンも広い。しかし、あれはたいがい人が住んでいない面積の広大なひろがりであつて、中国のように地峡の底のひとつひとつに人間がエイエイと何千年住みつづけて来たひろがりではない。中国の場合、広さに人間のいとなみの深さがからみついてい

る。もう少しことを大きくして考えてみると、なるほど国の面積の広さから言えば、中国は広大なシベリアをもつソビエト、北方に途方もない広さの凍原をひろげるカナダについて世界で三番目の大きさの国だが、人口から言うると今や十億に達する人口を持つ中国はもちろん世界最大の国だ。この十億があちこちに住みついて、エイエイとそれぞれに巨大な歴史を背負って生きて来ている——この判りきった事実が今さらのように眼に見えて来たように思えたのは、その中国のグラランド・キャニオンを見下しているときだった。地峡の底のひとつひとつに歴史が根をすえていて、地峡は縦横にひろがる。ひとつの地峡から他の地峡に行くのは地形上きわめて困難である。いきおい、地峡の底の歴史はひとつひとつ、独自のものになろうとする。まして、地峡の底におたがいにとつて異民族が住みついているとするなら——そのこともあって広さ、深さのことを言うのだが、当然、これはこの歴史の広さ、深さをひとつにまとめ上げて現在、未来をかたちづくるむつかしき問題になるにちがいない。地峡の底で人びとはそれぞれに生き、それぞれに歴史をつくり上げて来たのだ。まとめ上げるのがむつかしくてふしぎはない。これはいつの時代でも中国の統治者が直面して来た問題だが、毛沢東の場合も、現在の政府の当局者の場合も決して例外ではない。

もうひとつ、下界の「地球のシワ」のごときさまが感じさせるのは、無限の時間の流れというふうな宇宙的な感覚だ。自然の広大だけがそれを感じさせるのではない。深く地表に刻み込まれたシワのひとつひとつに人間を住まわせて来た自然のふところの深さがそういう感覚をかたちづくるのにちがいない。シワのひとつひとつの底で時間は動き事物は変化するのだが、その変化を大きくふくみ込んでもうひとつ大きな時間が流れている。時間は決してそこで停止しているのではない。ただ、それ

自身の法則に従ってゆつくり流れている。毛沢東が一九四九年四月の長江の大渡河作戦の勝利、南京占領をうたった詩は「天若有情天易老」の高名な一句をふくむ詩だが、西安から延安、下界の地表を見下して、ふと私の記憶にゆみがえつて来たのはその詩句だ。そういう「天」の無限の時間がゆつくり流れている。

これは毛沢東という偉大な革命家にして統治者であつた人物だけが持つている感覚ではない。シワの底に住む無名無数の人間——統治される側の人間もひとしくわかちあつている感覚だろう。統治する側に「天若有情天易老」の無限の時間の流れに対する冷徹な眼があれば、いつときどのような災厄が来ようがそれは過ぎ去るといふリアリズムが統治される側にあつてふしぎはない。この災厄のなかには、もちろん、統治する側がひき起こす政治の災厄も入っている。

4

延安はひと口に言えばその「地球のシワ」のひとつの底の地方都会である。それまたいして深くはないシワだが、そこに人が住みついて、もうたしか三千年にもなる。唐の時代に建てられたという仏塔が、二つの河が合流するかたわらの丘の上に立つて、街を見下している。

このあたりの自然が苛酷なことは、そのままだしも浅いシワの底めがけて飛行機が降りて行くときに、気流が悪いのだろう、大ゆれにゆれたことひとつで判る。帰途は午後温度が上昇して気流が悪くなつて飛べなくなり、空気が冷えるまで空港で何時間か待った。往路も旧式のプロペラ機はゆれにゆれ、吐く人も何人か出て来るなかで地峡の底に突っ込むようにして降下する。毛沢東は、自分はべつ

に好きこのんでこの地域を選んだわけじゃないと言っていたそうだが、地峡の両側の山脈の木一本ないむき出しの土の壁にいくつも洞穴が見える。半つぶれのものが多いが、まだ完全に使えるものもある。これが「彼ら」が住んでいたところだと感慨はあるが、そのまま飛行機は大きくゆれながら強引に着地する。地峡の底が自然にかたちづくった滑走路で、面白いのは飛行機から降りてすぐ乗った車がそのまま滑走路を街めがけて走り出したことだ。滑走路ができたところで（昔の滑走路はその今の滑走路がつきるあたりにあつて、そこから「西安事件」の処理のために周恩来らが飛び立った）、街が突然始まった。「地球のシワ」の底のひとつに人間が住みつき、その人間が住みつくことのなかにかつて「彼ら」が住み、くらし、そこを「根拠地」としてたたかうこともあつて、「中国革命」という途方もない大事業をやつてのけた場所だ。その街なみがそこで始まった。

とは言つても、そういう言い方は私はかなり感傷的な思い入れであつたと言えなくもないだろう。私たちのまえにまず立ち現われて来たのは、もちろん、毛沢東が今げんに「矛盾論」を書いている「現場」の洞穴ではなかつた。かつて彼がそこでその偉大な労作を考え、書き、同時により現実的、具体的な革命勝利の作戦をねつた洞穴の跡でさえなかつた。私たちのまえに出現したのは周囲のむき出しの黄土の山からたえまなしに吹き飛んで来る土埃に屋根と言わず壁と言わずいちめんに覆われた建物の並ぶなんのへんてつもない地方都会で、埃っぽい空気のなかを人びとが歩き、自転車が忙しく行き来し、そこが「自由市場」なのだろうか、農民らしい男や女が地べたに野菜やらお手製のものらしい日用品やらを並べて売っている。

そのなんでもない風景が意外な気がしたのは、私とあろうかという気持がしないわけでもない

が、「革命の聖地」に来たという意識に私もやはりどこかでとらわれていたからだろう、そこが「長征」を経て紅軍がやって来て「根拠地」を定めるまえも三千人ほどの住民が住んでいた田舎町であったことも、「根拠地」になつてからも、いわば、ふつうの人びともそこに住んでいた事実も、私の記憶から消し飛んでしまつていた。かつて延安に出かけて「訪問記」を書いた外国人はエドガー・スノーを皮切りとして何人もいるが、彼らの「訪問記」のなかで私が心ひかれるのはガンサー・スタインの「延安 一九四四年」で、その理由は、そこには他の人の「訪問記」にはたいして出て来ない、当時のふつうの延安の住民のくらしのさまが顔を出しているからだ。たとえば、次のようにである。「鍛冶屋は野天の小屋で農具をつくつていた。職人は道端で煉瓦をやいていた。商人たちは小さな屋台や店で忙しくしていた。子供らは大きな校庭ではしゃいでいた。」あるいは、「延安の新市区は、「旧延安県城から」傍にそれた小さな谷間にあつて、数百軒の露天風の店がならんだ、買物街であつた。私はそこへ出かけていって一人の鍛冶屋と仲よくなつたので、誰か商店の主人でこれかと思う人と折入つて話したいから紹介してくれないかと頼んだ」（野原四郎の訳による）——というような話からそのころの延安の街に住みついていていた人びとのことが紹介されて行くのだが、そういう記述は他の人の「訪問記」にはあまり出て来ないようだ。

そのなんのへんてつもない地方都会延安の街なみを見ているうちに、「文革」のさなかにここにやつて来ていたらどんなぐあいだつただろうかという気がしきりにして来た。そのときにはもちろん地べたに野菜を並べて売るといふような「自由市場」は存在しなかつただろうし、街には「革命の聖地」詣ではるばるとやつて来た紅衛兵がいくらでもあの赤い小さな本をふりながら歩いていて、もつと

騒々しかったにちがいない。黄土の土埃でいちめん覆われた壁には「造反有理」というふうな当時はやりの文句がにぎやかに書きつらねてあったことだろうし、その革命的きまり文句のまえを外国人の「革命参詣客」を乗せた車が何台も通り過ぎる。あのころ、さらにひと昔まえの延安がそうであったように、延安は人口五万という小さな地方都会の尺度をはるかに越えて世界的な存在にまでふくれ上っていたのだが、さて今はそうした革命的熱狂を失ってその尺度にふさわしい地方都会の安穩と静けさに立ち戻っている。

その感じは、延安を延安たらしめている黄土の山壁に掘られたかつての革命の英雄たちの洞穴にも及んでいて、もちろんもう今はそのたいいはずぶれるなり何かの倉庫に用いられたりしていて、私がかここで述べようとするのはきちんと保存されて「聖地」となっている毛沢東、朱徳、周恩来などの革命の英雄たちのなかでも大立物の洞穴のことだが、見物人はどこへ行っても私たちのほかにホテルでいっしょだった「革命感傷旅行」の老人と彼のおつきらしい二、三人とときたまどこかの洞穴で出会うだけだったという事情もあつてのことだろう、奇妙に静まりかえつた感じで、革命の熱気をこちらに激しく吹きつけて来るというよりは、すでに完全に歴史の遺物となったものをショウケースのガラス越しに見ている気持になった。たとえば、天安門の横の巨大な歴史博物館のなかを歩いているみたいなものだ。いや、そのなかでも私の言いたいのは、その半分を占める中国革命の歴史にかかわつての部分で、他の半分の北京原人に始まる古代、中世から近代に至る部分は北京駐在の商社員の客らしい、あるいはシルク・ロード見物の観光客らしい日本人をあまたふくめて見物人で組み合っているというのに、こちらのほうはガランとして人影はなかった。「文革」のさなかな

ら——と言ってもそのころ博物館が開いていたのかどうか私は知らないのであくまで想像のなかで言うことだが、博物館のその部分には赤い小さな本をふりかざした紅衛兵の若者たちがつめかけて、そこにムンムンとみちあふれた彼らの革命の熱気が展示物に潜む革命の熱気をいやおうなしにひっぱり出して、おたがいの革命の熱気が照応しあう熱っぽい空間に化していたというふうなことがあったかも知れない。そこへウカウカ入って行くと元来は革命に無縁な外国人の観光客でも革命の熱気、いや、毒氣にたちまちあてられて身動きならぬことになる。つまり、そこでは外国人観光客も決して安全でなかったわけだ。いつなんどきガラスケースのなかの展示物から今は亡き革命の英雄たちがガラスを叩き割って出て来て、「おまえは何をしている」と叱咤したかも知れなかったのである。

しかし、もう今はそんなことはなかった。博物館の革命部分には人影はなく、すべてがひっそりと静まり返って、展示物は展示物としてガラスケースのなかにおさまっていて、そこから英雄たちがガラスを叩き破って出て来る気づかいはない。その部分には新しく周恩来、朱徳、劉少奇三人にかかわる部屋がつくられていて、そこには新設ということもあつてか人はけっこう来ていたが、そこで人びとの展示物を見る眼は、革命の熱気にみちた眼ではなくて、たいへんな時代でしたね、たいへんな目にあなたはおあいになった、いや、わたしもあつた、しかし、もうどうやらあの災厄の時代も過ぎましたねというふうな「文革」にかかわつての同情と回顧の眼であるように見えた。ことに劉少奇の部分がいちばん新しかったのか人はそこにはつめかけていて、劉少奇の「遺品」を見る人びとの眼はたしかにそんなふうなものだった。

延安で革命の英雄、大立物たちの洞穴をあちこちめぐっているうちに私が連想したのは今述べたよ

うなことだが、博物館に劉少奇にかかわる部分が新設される世の中だ、ひところは閉鎖されるどころかその存在さえ「奪権」のあげくにご本人同様抹殺されかかっていたにちがいない彼の洞穴も「復権」していて、毛沢東の洞穴と同格の標本もあれば、案内役の女性もためらうことなく案内して行ってくれる。

北京の清華大学の教授の令嬢だった彼女は六八年に自ら「下放」を求めて延安まで来て、そのまま居ついたというのだが、それだけの経歴でただちに了解できることは、まだまだ若く見える、いや、実際にもまだ若い彼女が「文革」にかかわつての有為転変、洞穴の「奪権」「復権」をふくめての世の浮き沈みをずっと目撃して来た人物であるということだ。

『文革』中はこの洞穴はどうしていたんですか。」

私は劉少奇の洞穴に入りながら、そして、そこで劉少奇がここでどうした、ああしたというふうな説明を彼女の口から聞きながら、その一問にすべての事情を凝集させたように訊ねていた。

「閉めていました。」

彼女もまたその一語にすべての事情を凝集させたように答えた。

私はものを書く人間なので、延安で大立物たちの洞穴のほかにかねがね見てみたい「現場」として、毛沢東が四二年に延安の文学者たちを一堂に集めて行なった「座談会」での「講話」（世に「文芸講話」として知られた「講話」だ。この「講話」ということばをどんなふうに訳したらいいのか、見当がつかない。「座談」と言うには重すぎるし、「演説」はこの場合騒々しすぎる。やはり、「講話」は「講話」だろう）が行なわれた場所だが、それは楊家嶺という地名の洞穴群のすぐ近くにあった。内戦のなかでいったん毛沢東たちが延安を退去したあと破壊されたのを修復してつくった建物が二つ、そこには

立っていた。ひとつは教会と見まがう外観と内部を持った会堂で、そこで対日戦後の状況の展開を視界に入れて第七回党大会が四五年四月から六月まで開かれたのだが、そのレンガ造りの建物の横にもうひとつレンガ造りの建物が立っていて、そこが「人民に奉仕する」文学という解放後の文学、つまり中国現代文学のあり方の基本を定めた「講話」の「現場」だった。

そのレンガ造りの会堂に集まった文学者たちも「人民に奉仕する文学」という「講話」の基本には賛成したにちがいないが、問題は、「人民に奉仕する」ことの中身だった。あるいは、方法のちがいであった。そこから意見がくいちがいがい、くいちがいははじめは平和的、友好的に解決をはかることのできる人民内部での矛盾であつたはずのものがおしまいには「文革」のなかであきらかに見られたような精神的抹殺どころか物理的抹殺さえもともなうまでのものになった。「文革」のなかでのいたましい死者として老舎の名はもう今さらあらためて言うまでもない名前だろうが、もっと早い時期からの犠牲者として丁玲、艾青の名前をここにここであげておくのは、さつき言った案内役の女性が二人の名前を特にあげて、会堂のまへの掲示板にかかっていた座談会の記念写真の文学者たちのなかから選び出したからだ。

べつに他意はなかつたにちがいない。ひとりには女性の作家だったし、もうひとりには彼女の好きな詩人だったからだつたかも知れない。あとで通訳のT君と何かしきりに熱心にしゃべっていたので彼に何を話していたのかと訊ねると、ひとつは、彼女は今日日本語を習っているのだが、その彼女の知識から言うと、T君の発音にはときどきまづいところがあると——そう彼女は手きびしく言っていたとT君は苦笑したが、もうひとつは、「文革」世代にふさわしいこの手きびしい批判家は詩を書いてい

て、彼女の敬愛する詩人の艾青がその詩を認めてくれて、今度彼の推薦で大きな文芸雑誌に載るので、こちらのほうはおめでたい話であった。道理で彼女、うれしそうに笑いながらしゃべっていたと思つたが、ただ考えてみると、彼女が「文革」に共鳴してここに自らを「下放」してやつて来たところには、まさに艾青は「文革」によつて迫害の極致に達していたのだ。艾青は、最近出た自分の詩の中国語・英語対訳のアンソロジーにつけた「自伝」のなかで、「四人組」の追放による「文革」の終結は、日本に対する勝利について自分にとつて二度目の「解放」であつたと述べている。

5

ただ、それにしても、延安に立ちこめる空気は北京や上海とはちがつて、奇妙に固い感じのものでつた。「文革」のときから変らずここにいるのは（お役所の人のことを言っているのだ。地べたで野菜を売っていたようなチマタの人のことではない）詩人志望の女性だけではなくて、その日の夜、夕食をともししているいろいろ延安の現代について話をしてくれたお役所の「幹部」という名で中国では総称して呼ばれるえらいさんたち三人もそのときからずっと変らずそこにいる人たちであつた。そうだからと言つて、べつに革命のお説教、あるいは「講話」をなさつたわけではない。司馬遼太郎の旅行記を読むと、ちょうどそういう人たちに旅行団のなかの位置づけにおいて、また性格において照応する人たち（ひと口に言つてしまえば、つまり、世の中どこにでもいるえらいさん、あるいは、えらいさんの性格の人たちだ）から、延安での質問は革命に焦点をあわせていたきたい、質問するというより学習するという気持で、と延安行にさいして注意を受けたということだが、「文革」のときから私

の会ったえらいさんたちが延安にいたとしたら、司馬たちもおそらく彼らに会って、彼らから革命の「学習」を受けたことになるだろう。私の場合は、誰もそんな「注意」を私にしなかったし、彼らのほうも、「革命旧址」と丘の上の仏塔のような昔からの歴史的遺跡とを結びつけてこれからの延安の「觀光」を考えて行きたいというような話をしただけで、もう革命のときの話など何ひとつ私にしなかった。それにだいたい「幹部」二人は一九三一年生まれで当時の記憶はまだあるにしても、他の一人はもう少し若くて延安には「文革」が始まってから来たのだから、三人ともに洞穴の革命の大立物たちが活躍していたころの話を第一次的情報として伝える位置にいるわけはなかった。

いや、もつと正確には、彼らにはそういうさして知りもしない話をもつともらしく「講話」するよ
うな革命的傲慢さがなくなっていたと言わなければならない。かつての延安体験者である友人とともに六十年に延安を再訪したスノーをおどろかせもすれば不愉快にしたのは、スノーたちの過去も知らぬままに生まかじりの「延安知識」を得々としゃべる案内役の青年だったが、もうそういう青年はすっかり姿を消してしまったようだ。こういう現象は今中国全体にあるらしくて、「文革」のときに来ていたらどこでも十中八九まちがいにちがいない、それぞれに革命の偉大と苦難の「講話」を傲慢にやつてのける大、中、小さまざまえらいさん（は紅衛兵の子供のなかにもあまたいたと言えば、私の言いたいことは判ってもらえるにちがいない）にはもう幸いにしてお目にかからずにすむように見える。今中国の社会全体を覆つてあるひとつの現象は、かつての革命的傲慢さに代つてのある種の謙虚さだが、それは「革命の聖地」延安にまで及んで来ようだった。私とア
ワ飯を主食にした夕食をともしたえらいさんは「文革」のことについても、延安にそのときはなる

ほどたくさんの紅衛兵や「学習」の旅の外国の友人たちがやって来たが、要するにここは宿泊場所を提供したようなもので「文革」そのものの影響はさしてなかったと、聞きかたによればかなりシニカルに聞こえる発言をしていた。だから、自分たちは変らずここにいるということであつたかも知れない。しかし、それにもかかわらず、延安という土地は、そこに住む人たちをふくめて私に「文革」の残滓——と言つて言い方がわるければ残り香を感じさせる土地だつたことも事実だ。何かすべてが固いのだつた。革命的固さと言つていいだろうか、「現場」の案内役の人びとの挙動、言動がそういうものを感じさせていて、ときどき私は「文革」がここではまだ生きつづけているような感覚を持った。かんぐつて言えば、中央政府が延安では「文革」後あちこちで大幅に行なわれたはずのえらいさんの入れ替えを行なわずに「文革」時の人たちをそのままおいているというのも、ここで大きく入れ替えをやらばややこしいことになるうんぬんの判断あつてのことではないのかという気もしないでもない。たとえ、延安のえらいさんたちが彼らの言うようにそれこそただの宿屋の番頭さんであつたとしても、「文革」ホテルの番頭さんであつたことはあるのだ。

そういうかんぐりが何か力をもつて迫つて来たのは、その夕食のあとでホテルの広間で催された映画とビデオ・テープを観る会ときだつた。映画はかつての洞穴の大立物たちの時代の延安をうつした黒白の映画で、そのときの毛沢東の若々しい姿かたちには私はおどろかされたのだが、それは私にとつての毛沢東は、やはり、中国革命のみならず世界革命の、そして現代世界史の最長老とも言うべき存在としてあつて来たからだろう。たぶんその映画は私たちのために上映されたにちがいがなかつたが、その次のビデオ・テープの上映は私たちのためと言うよりは、はじめ私たちだけで行つていた会場に

ぞくぞくとやって来たさまざまな姿かたち、顔立ちをしたえらいさんたちのためのものであったにちがいない。それは延安の民兵の軍事訓練風景をうつし出したもので、その訓練が最近のものであったことはうつし出したのがソニー製のビデオ・テープであったという一事で判ることだが、えらいさんたちも私たち同様はじめてそのテープを観たのだ。

指揮官のまえでの分列行進、女性もまじる射撃訓練、匍匐前進の稽古……というふうには軍事訓練としてはありきたりのものだが、なみの軍事訓練とはちがって、これはあくまで民兵——つまり、農民自身の訓練風景であることだった。彼らは銃を持って整列していても、やはり、折り目の正しい軍服をきちんと全員が着てよく整備された銃を持つ今の人民解放軍の兵士の整列風景よりも、はるかに軍服も不ぞろいなら銃も新旧入り乱れていたかつての紅軍の整列風景に似ていた。いや、もうひとつ言うなら、さらにいつそうムシロ旗の農民一揆の勢ぞろいの光景に似ていた。

ここで私が、あるいは、この私の文章を読む読者が「文革」にかかわつての記憶を想起してもふしぎはないだろう。彼らがそこで「造反有理」の旗をかかげるなら、ことはまさにそんなふうなものとして私の眼のまえに展開することになるかも知れない。もちろん、中国の各地でもこういう民兵の訓練をやつてのけているという想像はして是可以である。しかし、どこへ行つても私が耳にするのは農民がいかに今ゆたかになりつつあり、立派な家を建てつつあるかというような話であつたし、実際に私が訪れた農村でも新築の彼らなりの「豪邸」で農民の語ることはそうしたことから、これらの全体はどこをどう押しても民衆の軍事訓練というような革命の熱気にあふれたものではなかつた。そして、ことはそういう訓練を実際に行なつていてというだけのことではなかつた。その訓練をわざわざ

ざソニー製のビデオ・テープに撮って上映するということが、それ以上に重要な意味あいを持つているようにも見えた。いつたい、誰に今、このビデオ・テープを観せようとしているのか。

私たちといつしよにテープの上映を観ているえらいさんには軍人が多かった。なぜ、そこにそんなにたくさん軍人が来たのか、誰に訊ねても要領を得なかったが、軍人さんという存在、人民に奉仕する人民解放軍であろうとなかろうと氣ばった感じをあたえることは否めない。民兵の訓練風景をソニー製のビデオ・テープで観たあと彼らは満足げな表情で立ち去って行ったが、北京からいつしよに旅して来た通訳のT君は「なんですか、あんな旧式な訓練。旧式の武器ばかり持って……」と軽蔑するように言った。

6

固い感じがしたのは、延安で私たちの世話をしてくれたまだ若いえらいさんのW君のせいだったかも知れない。大学でスペイン語の勉強をしたというカーキ色の軍服まがいの人民服を着たW君は私たちのような外国からの観光客の世話をするお役人だったが、彼も「文革」のときから延安にいる人物で、私の決して革命的ならざる質問にいささかウンザリしているけはいは十分にあつた。「文革」のとき、こういう人の下に指導されたりしたらかなりしんどいことになるなと思わせるものを彼はどこかしら匂わせていて、「どうですか、スペイン語をしゃべる外国人はこのごろやって来ますか」と訊ねると、「来ない」とニベもなく答えた。微笑もなく、である。

そういう彼のぶつきらばうな答え方がいささか心にざらついたのは——いや、これは私の心にざら

ついたと言うよりは私の「人生の同行者」の心にざらついたと言ったほうがことの事実によりそくしているかも知れないが、「人生の同行者」が「延安で昔朝鮮人たちがいた洞穴はどこですか」と訊ねたときだった。通訳のT君がその日本語を中国語に通訳するのも待たぬようにして、「そんなものはなかった。朝鮮人などはいなかった」と彼は言下に断言するように答えていた。

私の「人生の同行者」は日本で生まれ育った朝鮮人だが、「民族教育」を日本で受けて、自分をずっと朝鮮人と意識して生きつづけて来た女性だ。愛読書のひとつが、延安に滞在していた（つまり、洞穴のどこかひとつにいたということだ）朝鮮の解放闘争の代表の聞き書きを本のかたちにとめたニム・ウェールズの「アリランの歌」であつたから、彼女の質問はまさに当然の質問であつたわけだが、W君の答が「そんなものはなかった。朝鮮人などはいなかった」とあつては彼女が気色ばんだとしてもふしぎはない。「朝鮮人がいなかったところではない」と私が言い彼女が言いして朝鮮の解放闘争の話をしたのだが、W君、たしかに「アリランの歌」の主人公たちが延安にいた（らしい）ことは認めたものの洞穴の存在についてはこれまで聞いたことがなかった。それゆえにそのありかについて知るはずもない。

夕食の席でえらいさんと会つたときに、「人生の同行者」は朝鮮人たちの洞穴の話を持ち出して、さすがにえらいさんたちはすぐ彼らのことは聞いていると言い、洞穴もあつたことを認めたが、どこにあつたかはえらいさんたちも知らない。飛行場のずつとむこうでここに朝鮮人たちがいたという話を村人から聞いたことがあるから、たぶん、そのあたりにいたのだろう。今度来られるときまでに探しておきますとえらいさんたちはこもごも言つた。

翌日、革命博物館に出かけたとき、私たちは「延安朝鮮学院旧址」の写真を見つけていた。「日本人民解放連盟」の人たちの写真や彼らが学んだ「労農学校」の「旧址」の写真の横にである。「朝鮮学院」は日本人たちの学院と同じように洞穴ではなくて黄土の山壁に密着するように建てられたレンガ造りのかなり大きな家屋だが、そこにいったい何人の朝鮮人が来ていたのだろうか。もう一枚朝鮮人たちにかかわる写真があった。いや、それはまちがいなく私たち日本人にもかかわるものだが、「日韓両民族」が連合して日本帝国主義を打倒しよううんぬんの「朝鮮義勇軍」の壁に大書した文字の写真だった。

博物館の案内役の若い女性に、この写真の「朝鮮学院旧址」のありどころを私たちは訊ねていた。若い女性は判らず、さらにその上のえらいさんが出て来たが、彼にも判らない。この写真はすべて北京から送られて来たものをそのまま展示しているだけだと心細いことを言う。今度来られるときまでに調べておきますと、ここでもえらいさんの約束があった。「私たちの存在はないみたい」とかねがね中国の「大国主義」に一家言を持つ「人生の同行者」は小声で言った。もちろん、「私たち」と言うのは私と彼女のことではない。彼女の祖国、民族のことだ。

7

日本人たちの「労農学校」の「旧址」はすぐ判った。えらいさんたちもW君もよく知っていた。延安の中心、二つの河の合流点を見下す見はらしのよい黄土の山の中腹の土づくりの大きな家がその「旧址」だった。家の背後の山壁には洞穴が並んで、それはまだこのあたりの住民の物置きとして利用さ

れているようだったが、かつてはそこに日本人たち——「日本人民解放連盟」の仲間だったもと日本兵の捕虜が住んでいた。彼らはそこに寝起きして、土づくりの家の「労農学校」に通っていたのだろうが、土づくりの家のなかには今二つに区切つてそれぞれに人が住んでいた。

こういうときすぐなかへ入つて住民と話したくなるのが私の困つた性分で案内役たちを困らせてばかりいたが、さて、私が訪れた「旧址」の一方の領域のほうの住民は、この地で生まれ育つたという五六歳の夫と四四歳の奥さんだった。夫はずでに「引退」して年金を月三十元もらつているそうだが、もとは運輸関係の仕事をしていたというから運転手をしていたのか、そのときには月給八十元をとつていた。二人のあいだには子供が五人いて、いちばん下の子供が十一歳。その子供のものらしい算術のノートが棚の上のついていた。家は十メートル四方ほどのただっ広い空間で、その半分ほどが土間、あとの半分はゴザを敷いた居間。土間の片隅に炊事道具が積み上げてあつたから、そこで煮炊きをやるのだらう。彼らとしばらく配給の食糧の話をした。やはり、米の配給は少ななくて、たいていアワ、トウモロコシ、それから小麦粉のよし。しゃべつていられるうちに外で日なたぼっこをしていたおばあさんが入つて来た。七四歳で、耳が少し遠くなつて、おばあさん、毛さんのことをおぼえているかと訊ねても要領を得ない。五六歳の彼女の息子はよくおぼえていた。何度も毛さんの姿を見かけたことがあるという。彼の通つていた小学校にも、毛さんはやつて来た。四七年に国民党軍が延安に進攻して来たときには、彼と奥さんの一族はそれぞれ延安を撤退する毛さんたちに従つて延安を離れた。「どうしてここに残らないで、毛さんについて行つたのかね。」

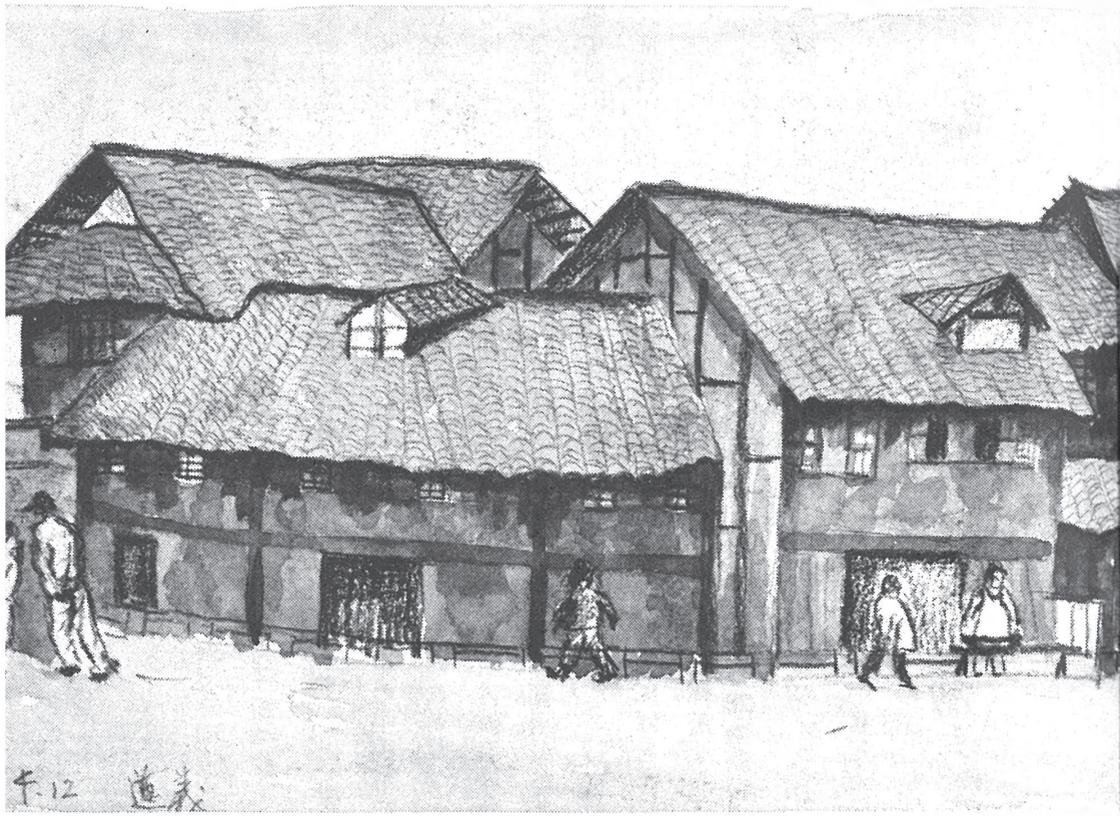
私は訊ねたが、答はなかった。あまりにも判りきつたことを私は訊ねたのかも知れない。

II 「長征」のあとをたどる



婁山関の山路





东12 道美

遵 義

中国革命の歴史を語るなら、二万五千華里（一万二千五百キロ）という途方もない距離に及ぶ中国紅軍の「長征」をぬきにすることはできないが、毛沢東の中国革命における指導者としての地位をゆるぎのないものにしたのも「長征」を通じてのことだ。そこで決定的な役割を演じたのは、一九三五年一月に貴州省の遵義で開かれた「拡大政治局会議」だが、今日「遵義会議」の名で歴史に残るその会議が開かれた遵義は、省都貴陽から北へ四川省へ抜ける街道に位置する山あいの小さな都会だ。歴史の偶然で会議がそこで行なわれなかったなら、中国人も大部分が名前も知らずにいるにちがいない、谷と言うにはあまりにも汚ない水の流れる山あいの川にそって高く伸びる、見るからに貧しくて街全体がくろずんだ感じのする地方都会だが、遵義の今の人口は三四万人。当時は三万人。

少数民族の多い貴州省は、今でも中国でもっとも貧しい省のひとつだ。たしかにただ旅して歩いていても、貧しさは同じ山間部に位置して、それ自体が貴州省以上に少数民族が多くておくれた省のひとつとされているお隣の雲南省にくらべてさえも目立った。雲南省で今農民ひとり当りの収入は年平均二百八十元に達しているというのに（全国平均は三百二・三元）、貴州省ではそれはまだ百七十余元だから、当然、ちがいは眼に見えて来る。省都の貴陽でさえが、街の中心に半ば崩れかかったようなワラ屋根、土づくりの家がいくらかもある都会だが、そこから遵義まで北へ百六十キロ、かつて毛沢東たちの中国紅軍が通過した街道の両側には美しい自然とともに今なお貧しい農村風景が展開する。

ワラ屋根、土づくりの半ば崩れかかったような農家はいくらも見たし、街道で出会う子供の服装もきわだって貧弱で、なかにはハダシでポロを身にまとっているとしか言いようのないものもいた。ただ、それでも、もちろん、昔にくらべると格段にくらしはよくなつて来ているにちがいない。解放前にくらべて——というような判りきつたことをここで言おうとしているのではない。そこまで話をさかのぼらせれば、ちがいは比較を絶している。また、それはもうまったくの歴史的過去のことになつていくのだろうか。街道筋のある村で立話をした農民はもう六十代も半ばの老農夫だったが、彼が昔よりくらしがよくなつたと言うときの昔も、ここわずか数年前の昔のことだった。中国紅軍が村を通過して行ったことは親父から聞いたと、たちまちあちこちの家から人びとが飛び出して来て私のまわりに黒山の人だかりとなつたなかで、老農夫はおぼつかかなげな記憶をたどるような顔で言った。彼の奥さんが横から、この先の鎮で紅軍は数日滞在していたと口を出したが、それも彼女が彼女の父親から聞いた話だ。

遵義もまさしく貧しさが瓦の一枚一枚にこびりついたような昔ながらの家並みがつづくお世辞にも美しいとは言えない都会だが、それでも昔にくらべると（解放前の昔、つい数年前の昔、そのどちらをとつてもいいだろう）、比較にならないほどゆたかになつて来ているにちがいない。中国の大都会なみに朝早く色とりどりの服装でジョギングをする若者や中年もいれば、公園で太極拳に余念がない老人たちもいたが、「遵義会議」に集まつた往年の革命の指導者たちはそんな人びとの姿をどれだけ予測し得ていたのだろう。ここ数年來人びとにそうしたゆたかさをもたらした政策の実行者として、ここで鄧小平の名をあげても誰しも異論がないにちがいないが、彼も「オプザーバー」として会議に

参加していた。

とにかく貴州省は「天無三日晴、地無三里平、人無三分銀」と言われて、自然条件、地理条件が苛酷で「三分の銀」も持たないような極貧の人たちが多かったところだ。事前の工作はあつたが、貧乏人の味方紅軍が江西省からあまた苦しいたかいの末にようやくこの小都会にまでたどり着いたときには、住民は街の入口の橋のたもとに集まつて歓呼して迎えた。今でもその橋はそのままのかたちで残っているが、そのあたりにも昔ながらの貧しい木造家屋の街なみがひろがっている。そこで食物を売る人も街を歩く人の姿も決してゆたかなものに見えない。工業は解放前にはほぼ「空白」だったと言われる貴州省も、もともと自然資源が豊富な省でその立地条件を生かした工業がここ数年急速な勢いで伸びて来ていて、遵義にもその橋にとりつく直前の街道ぞいに五十年代にソビエトの援助でつくつた、そして、今はもう設備が古びてしまつて西ドイツの機械をこれから取り入れるのだというマンガンの冶金工場があつたが、同じ街道を通つて紅軍がやつて来た当時にはそんな工場などは遵義のどこにもなかつたから、彼らを橋のたもとで迎え入れた人びとの大半は農民だつただろう。農民でなかつたなら、毛沢東の階級分析によつて「半プロレタリアート」に分類される行商人や商店の店員、あるいは、村の鍛冶屋のたぐいの人たちだつたにちがいない。いずれにしても、紅軍の革命を必要としてもいれば、紅軍もまた彼らの支持を必要としていた人たちだ。

地主や金持たち——そういう連中のことを遵義のことばでは「紳粮」と言うのだそうだが、彼らとはつづく昔に逃げ出していた。おかげで市内に入り込んだ紅軍の指導者たちもぬけのカラになつた彼らの豪勢な邸宅にうまく住み込むことができた。紅軍の野戦部隊は市外にとどまつて入り込んだの

は毛沢東らのお歴々だけだったらしいが、毛沢東が遵義にいるあいだ滞在していた邸宅に入って、彼が寝起きたという二階の部屋に上ると、大きな窓から当時とさしてちがいはないと見える貧しくろずんだ街なみが見わたせた。

その邸宅は毛沢東ら軍事指導部の面々が泊まっていた宿舎だったが、若き日の鄧小平を一員とした政治指導部が宿舎兼事務所に使っていたのは、邸宅の川向う、「遵義会議」の会場のつい裏手の横丁に位置する「天主堂」だった。「天主堂」はかなり大きな規模のもので、学校でもそこに附設されていたのかも知れない。八四年四月、私たちが遵義を訪れたときには、「遵義会議」五十周年を翌八五年にひかえて修復中の「天主堂」のてっぺんには、大きな十字架がいかにも場ちがいな感じで立っていた。「遵義会議」の会場も、もとは国民党の師団長の邸宅だったという、外に回廊をめぐらせた、回廊の白い柱と建物の黒い壁が目立つ二階建ての洋風の建物だった。三二年だかにできたというのだから、まるで「遵義会議」のために建てられたみたいな話である。今は記念館になったその建物も五十周年をひかえて修理中だったが、それでもなかへ入れた。あちこちに革命の大立物たちが寝泊りしたり事務をとったりした部屋があつて、二階の一室が「会議」の行なわれた「現場」だったが、案外狭い部屋で、あれでよく出席者二十名が入れたものだと思うが、大きな長方形のテーブルのまわりに椅子が並べられていた。テーブルの下には、そのときそれで暖をとったという大きな石の火鉢がおいてあつた。椅子は模造品だが、あとはすべて当時の本物のよし。

あちこちの部屋の壁に、紅軍の戦士たちが残して行つたスローガンの文字があつた。紅軍が立ち去つたあと、帰つて来た師団長閣下が激怒して部下に削り落とせと命令したらしいが、彼の部下の白

軍兵士のなかには紅軍に好意を持っているのもいて、命令を実行しなかつたので今日まで残った。いろんなスローガンの文字があつたが、もつとも面白かつたのは、壁の文句より紅軍がどこかの家の戸板に書き残して行つた長い詩のような文句だつた。韻だけは踏んだ口語と言うよりは俗語を使った自由詩で、中国ではこういう形式の詩を「打油詩」と言うそうだが、遵義のことで記念館の女性に頼んで読んでもらつたら、なかなか勢いとリズムがあつてよかつた。面白いので全部を書いておきたいが、少し長すぎる。最初の部分だけ紹介しておこう。

「紅軍至乾人笑 紳粮叫白軍至 乾人叫紳粮笑。」

「乾人」とは遵義地方のことばで、無一文、極貧の貧乏人のことを指すそうである。まことにすつかりかん、からだもひからびている感じでうまいことばだと思うが、「紳粮」もさつき述べたように地主その他のおえら方のことを言うこの地方のことばである。「紅軍」に対して「白軍」は具体的には貴州省の軍閥王家烈の軍隊を指しているが、中国ではもともと紅はおめでたい色である。白は逆に不吉、よくない色。この「打油詩」の紅軍に対するに白軍の対比、感じはよく出ている。災厄のもとだつた白軍を追い払つたあとおめでたい紅軍がやつて来たとき、たしかに遵義の「乾人」たち、こぞつて彼らを歓迎しただろう。「紳粮」は悲鳴をあげて逃げてしまい、逃げたあとの彼らの邸宅のひとつで、「遵義會議」は開かれた。

つづきは製品版でお読みください。